

# 2024(令和6)年度 入学試験問題

東大・医進クラス 2月1日 AM

## 適性検査 I

### 注 意

- 指示があるまで表紙を開かないこと。
- 問題および解答用紙の両方に受験番号・座席番号を記入すること。
- 声を出して読まないこと。
- 解答用紙の受験番号欄は、以下のように1マスに1つずつ数字を記入してください。

受験番号	1	2	3	4	5
------	---	---	---	---	---

- 解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。

受験番号	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
座席番号	<input type="text"/>				

# 1 次の文章1と文章2を読み、あとの問題に答えなさい。

## 文章1

私たちは普段、当たり前のように「自由」という言葉を使っているが、いざその意味を考えてみると難しい。「自由」とは何かを考えてみよう。

どのような出来事にも原因がある。人間の行動も同じだ。例えば、皆さんが考えたり、その結果として行動するとき、脳の細胞間では電気が走っている。脳の中には電気の回路がつけられていて、私の話を聞いて理解しようとするとき、どこかの部分が活発に働いているはずだ。物理学で習う電気の反応と同じようなことが、脳でも起こっている。皆さんが通常、自由に振る舞っているように見えることも、実はすべてに原因があるのだ。

では、この「原因」と「自由」は、どのような関係にあるのだろうか。何か原因があることによつて、初めから結果が決まっているならば、それは「自由」とは言えない。「自由」とは、あくまで自分で決めるからこそ言えることで、あらかじめ原因があつて起こることではないからだ。

現代の社会状況では、私たちにはいくらでも選択肢がある。つまり自由はいくらでもある。けれども私たちは、「自由がない」と感じている。実際、自然科学を基礎に考えれば、すべての事象に

は原因があるのだから、自由というものはたらく余地などないはずだ。しかし、他方で私たちは生きていくうえで、「自由」という言葉や、概念がないと生きていくことができない。なぜだろうか。

例えば、人が失敗したときに「お前のせいだよ！」という言い方をする。そのように人を責めることができるのは、失敗した人が自分の意図でやったという前提があるからだ。あるいは「あなたのおかげです」と褒めたり、感謝したりするのも、その人の自由な意志で決めた結果だと考えるからだ。

だから自由のもとに物事が決まらなかつた場合は、「あの人のおかげ」とか「あの人のせい」とは思わない。たまたま運悪く落石が頭にあたつてケガをしたとき、石に「お前のせいだ」とは言わないだろう。石は自由な意志で動いたわけではないからだ。

このように、自由というものを「理論」と「現実」の関係で考えると、理論上は自由がはたらく余地はまったくないのに、生きていくうえで現実として自由というものの存在を感じずにはいられない。そう考えたときに、「自由とはなんだろうか」という問いが出てくる。これが今回の話の大きなテーマだ。

先ほど例に出した「お前のせいだよ」「あなたのおかげだよ」というのは、その相手が「自由な主体」であることを前提にしている。「あなたのせいだ」との言葉は、「あなたの自由な選択に

よって、こういうことが起きた」という意味を持つ。つまり「自由な主体」とは、「責任を担う主体」と同じことなのだ。

一般に、人間は生まれてから、「自由な主体」として成長し、ならんかの責任を担っていく。分かりやすく言えば、「責任を担う主体になる」とは、「大人になる」ことだ。子どもは、他人に依存して生きていて、行為のすべてに責任があるとは言えない。しかし「大人」になれば——ここでいう「大人」は二〇歳になるという意味ではない——例えばテストで悪い点をとるなど失敗をすれば、「勉強不足なあなたのせいだよ」などと言われる。そういう意味では、皆さんだつて十分に「自由な主体」になり始めていると言えるだろう。人間は成長するにしたがつて、自由の範囲が大きくなっていくのだ。

(大澤真幸 『自由の条件』による)

## 文章2

あなたは、「休み時間が終わったら、早く教室にもどきなさい」、「宿題を忘れないように!」と、先生やお母さん、お父さんに言われたことがありますね。でも、「自由にしていいよ」と言われることはめつたにないと思います。

私が小学生だつたころ、担任の先生から突然「きょうの2時間

目は自由な時間」と言われたことがありました。ふだんありえないできごとと思わず飛び上がって喜び、ガキ大将だつた友人たちと運動場でドッジボールをして遊んだ覚えがあります。

それがあまりにも楽しいできごとだったので、家に帰って母に話したところ、それを聴いていた祖父が、「もしも、きょう1日みんなの自由時間にしていいよ、と先生に言われたら、おまえはどうするんだ」と声をかけてきました。私が、「ドッジボールかソフトテニスかな」と答えると、「1時間目から6時間目までドッジボールとは、よくあきないものだなあ。それでおまえは楽しいのか」と聞き返されたような気がします。

小学生だつた私は、思いもかけない自由な時間を、先生からの大きなプレゼントとして、せいっぱい楽しむことができました。しかし、先生や親からまったくしぼられることなく使える自由な時間が、1か月、あるいは1年であつたとしたら、どうでしょう? このような長い時間を、いったい自分たちはどのような過ごし方したら良いのか、なんだか不安になってきます。あり余るほど自由な時間をどのように活かせば良いのか、だれも決めることができずに、時間をもてあまし、ムダに過ごすことになってしまいかも知れません。せつかく手にできた、貴重な自由を活かすためには、それをどのように使うと良いのか、自分で考えて決めるなければならないのです。

江戸時代には、大きな権力をもった將軍に、自分の言いたいことを自由に言うことや、自分の思い通りに生活する権利をみとめてもらえなかったときがあります。しかし、その時代に生きた人びとは、自由がきかない毎日の生活の中から、少しでも自由を見つけて出して楽しもうとするなみだぐましい努力をしていました。

たとえば、江戸幕府は、武士や町人に対してたびたびぜいたくを禁止する規則を出していました。着物の材質や色、もようまで、厳しく決められていたそうです。しかし、おしやれが大好きな江戸っ子のために、職人たちは知恵をしぼって、もようを細かく目立たないようにした着物をつくったり、落ち着いた色の着物のうら地に、はでなデザインの布をぬいつける「かくし衣装」という工夫をしていました。

いまの私たちには、日本国憲法によって自由に生きる権利が約束されています。しかし、この約束には、あなたが自由に生きた結果起こったすべてのできごとについて、あなたが責任を取らなくてはいけないという義務もふくまれています。自由をまもるためには、この義務を忘れてはなりません。

夏休みには、あなたが使うことのできる時間がたっぷりありますね。その夏休みを自分の好きなことばかりして自由に過ごしてしまつた結果、宿題を完成できなかつたとすれば、その責任はすべてあなたにあるのです。

自由が約束されることによって、あなたにできることは無限に広がります。でも、自由な時間を自分で決めて過ごすことや、自由を活かすきけることは、意外にむずかしいことだと知つてくたさい。

（菊田文夫『みらいへの教科書 きみと友だちとよのなかと』による）

〔問題1〕 文章1に「自由」とは何かを考えてみよう。とあります。

すが、「自由」について筆者はどのように考えていますか。次の説明文の A B C D にふさわしい言葉を、本文中から指定の字数で抜き出しなさい。

A (四字) を基礎に考えれば、自由に振る舞っているように見えることにもすべて

B (二字) が

あり、自由がはたらく余地などないはずなのだが、生きていくうえで「あの人のおかげ」とか「あの人のおかげ」という言い方があるように人間は「C (五字)」であることが前提になっており、「C」とは「D (七字)」と同じ意味を持つ。

〔問題2〕 文章2に自由を活かすことは、意外にむずかしいとありますが、その理由を本文中の表現を使って、五十文字以内で説明しなさい。

なお、「や。や」などもそれぞれ字数に教え、一まずめから書き始めること。

〔問題3〕 八王子学園の校歌には「自由の学び舎 八王子学園」という一節があります。「学び舎」とは学校のこと

ですが、文章1、文章2をふまえると「自由の学び

### 〔手順〕

舎」とはどのような学校を指すと思いますか。自分の考えを四百字以上五百字以内で説明しなさい。またそのような学校があったとしてあなた自身はそこでどのような学校生活を送りたいかも合わせて説明しなさい。ただし、あとの〔手順〕と〔きまり〕にしたがうこと。

1 文章1、文章2に共通して語られている「自由」の性質について書く。

2 〔手順〕1をふまえてあなたが考える「自由の学び舎」について書く。

3 〔手順〕2のような学校があったとして、そこでどのような学校生活を送りたいかを書く。

### 〔きまり〕

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○、「や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書きます。(ますめの下に書いてもかまいません。)

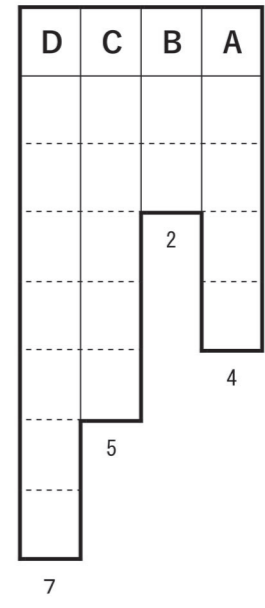
○。「と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、「」で一字と数えます。

○段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

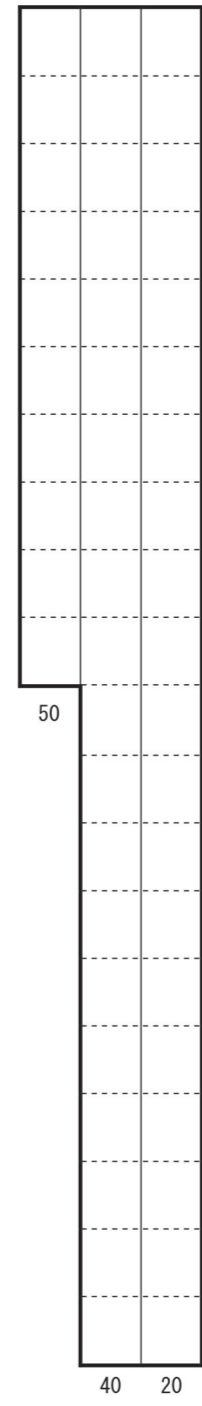
○最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。

1

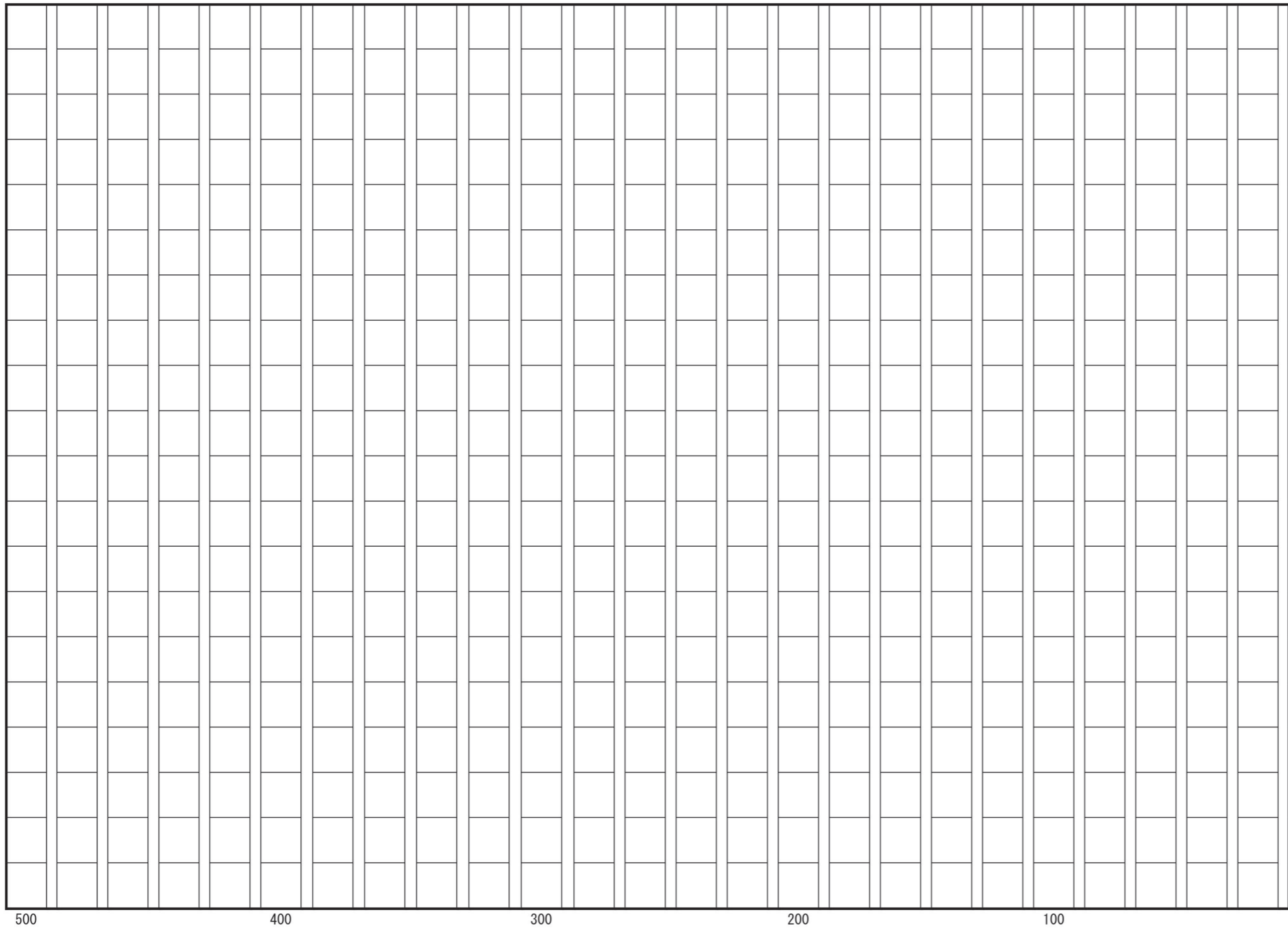
〔問題1〕



〔問題2〕



〔問題3〕






受験番号				
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

座席番号
<input type="text"/>

総得点
<input type="text"/> / 100

を	任	由		任	こ	「		問		い	に	自	問		D	C	B	A	問
し	で	の	こ	が	と	自	二	題		か	つ	由	題		責	自	原	自	題
て	自	学	の	と	で	由	つ	3		ら	い	に	2		任	由	因	然	1
い	分	び	考	も	は	」	の			。	て	生			を	な		科	
る	の	捨	え	な	な	と	本				、	き			担	主		学	
学	目	」	方	う	く	は	文				自	た			う	体			
校	標	と	を	も	、	後	に				分	結			主				
で	を	は	学	の	自	先	共				が	果			体				
あ	定	、	校	で	分	考	通				責	起							
る	め	生	に	あ	で	え	し				任	こ							
と	そ	徒	当	る	決	ず	て				を	っ							
考	れ	一	て	と	め	好	書				取	た							
え	に	人	は	い	た	き	か				ら	す							
る	向	一	め	う	行	勝	れ				な	べ							
。	け	人	て	こ	動	手	け				け	て							
	て	が	み	と	に	に	れ				れ	の							
	日	自	る	あ	は	行	ば				な	で							
	々	分	と	る	必	動	ら				ら	き							
	努	の	「	。	ず	す	ら				ら	ご							
	力	責	自		責	る	は				な	と							

						つ	多	う	良	を	あ		る	徒	に	で	標	の	ら	
						と	く	な	い	持	る	私	こ	が	な	は	で	の	さ	勉
						も	の	学	影	っ	の	に	と	ま	な	あ	で	は	れ	強
						考	人	校	響	た	だ	は	が	わ	い	れ	は	な	て	で
						え	々	生	を	生	が	学	で	り	か	ば	い	い	る	も
						る	と	活	与	徒	、	校	き	に	と	最	か	こ	部	
						。	の	を	え	た	「	の	る	た	後	と	と	こ	活	
							関	送	合	ち	自	教	と	く	ま	思	。	と	動	
							わ	り	い	と	員	員	思	さ	う	。	は	は	で	
							り	たい	目	関	に	う	。	ん	。	な	な	も	、	
							は	。	標	わ	る	な		い	ま	か	か	他		
							き	そ	に	る	と	い		れ	た	な	な	人		
							つ	う	向	こ	い	う		ば	。	か	か	か		
							と	し	か	と	う			、	自	う	う	ま		
							将	た	っ	で	で			自	分	分	と	く		
							来	学	て	、	色			分	が	と	が	い		
							の	校	い	お	々			も	ぐ	で	定	か		
							役	生	け	互	な			が	じ	め	た	な		
							に	活	る	い	目			ん	け	る	い	い		
							立		よ	に	標			ば	生	の	の	目		
											が				う			や		

( 二十 字 × 二十 三 行 )